

日中友好のしんぶん

日本と中国

2019年第1号

発行：岐阜県日本中国友好協会

500-8117岐阜県岐阜市南殿町2-10

TEL / FAX 058-240-0621

E-mail:mdzg4339@yahoo.co.jp

中国くるぶ講演会

日中関係、安定期に

「安倍首相訪中など解説」

宮本雄二 元駐中国大使

岐阜県日中友好協会主催の「ぎふ・中国くるぶ講演会」が10月27日、瑞穂市の朝日大学であり、元駐中国大使で宮本アジア研究所代表の宮本雄二さんは安倍首相訪中を評価し、「日中関係は安定期に入った。日本は米中衝突を回避させる大役を担っている」と語った。

講演会は日中平和友好条約締結40周年、岐阜県・江西省友好提携30周年を記念して開き、今年3回目になる。宮本さんは2006年から10年まで駐中国特命全権大使を務めた。

新年のご挨拶

岐阜県日本中国友好協会

会長 杉山 幹夫



平成最後の新春を迎え、謹んでお喜び申し上げます。日頃から当

協会を支援、諸事業にご協力を賜り誠にありがとうございます。年頭にあたり、抱負を述べさせていただきます。



安倍首相の訪中によって日中関係は安定期に入ったと話す宮本雄二さん
＝朝日大学

宮本さんは「台頭する中国、激変する世界、日本の立ち位置」と題し、安倍首相の訪中や米中貿易摩擦の見通しなどを解説した。「日中は激しく殴り合い、ようやく握手をした段階」と首相訪中を評価し「今は薄曇りだが、習近平国家主席の訪日を実現すれば晴れる。中国が『知財』の世界ルールを受け入れると、日本

企業はやりやすくなる。中国は再び日本から学ぼうとしており、第3国での協力をウイン・ウイン・ウインの関係にすべきだ。日本の最大課題は「米中を衝突させないこと。安倍首相は中国の信頼を得てトランプ米大統領に働きかけなければいけない」と語った。

結びに際し、約120人の聴講者に宮本さんは「日中関係を損なう一番の原因は歴史認識。日本が過去に中国で何をやったか勉強してほしい。卑屈にならず、『近所付き合い』のマナーを心掛けることだ。中国人の方には戦後の日本人の大多数は戦争を反省し、平和国家をつくってきたことをよく認識してほしい」と呼びかけた。

(講演要旨は3面から)

日中関係は、昨秋の安倍首相訪中によって安定期に入りました。平和友好条約締結40周年という節目に首脳同士が会談しました。政府間の署名文書、第3国での企業などの投資協力覚書がいくつも交わされ、新たな関係へ一歩を踏み出しました。尖閣国有化以来、関係改善を強く願う両国民の支持があったからです。

県内の主な出来事は岐阜県と江西省の友好30周年で、協会会員有志が訪中し南昌での記念行事に参加しました。また、浙江

省杭州市では同省、同市対外友好協会と意見交換し、民間交流の促進で合意しました。ぎふ・中国くるぶ講演会は3回開催。うち10月は100人超の参加者が、講師宮本雄二・元駐中国大使の習近平政権、米中貿易摩擦、日中関係の現状と今後について耳を傾け、中国との向き合い方に心を新たにしました。

その米中関係は当初の貿易摩擦から覇権争いの様相を見せています。昨年12月の米中首脳会談でいわゆる「90日猶予」で休

戦状態ですが目は離せません。6月のG20大阪サミットに習近平国家主席が来日するのはほぼ決定とのこと。日中友好ムードはさらに高まるでしょう。たくさんの中国人が観光などで岐阜県を訪れ、県民との交流の機会が増えることを望みます。

最後に今年は岐阜市と杭州市の友好提携40周年の節目でもあり、当協会はこれからも民間交流の橋渡し役を担ってまいります。

**岐阜県・江西省
友好提携30周年
記念行事に参加**

岐阜県・江西省友好提携30周年記念行事が11月8日、省都南昌市であり、県訪問団（団長・古田肇知事、約90人）に県日中友好協会から杉山幹夫会長ら計7人が参加した。

岐阜県と江西省は1988年6月に協定書を交わし交流を続けている。2018年9月、江西芸術団（団長・毛偉明副省長）が県図書館ホールでコンサートを開き、今回は答礼訪問。

古田知事と易煉紅省長は30年の節目を機に観光誘客、花卉（き）、林業、環境交流促進の覚書に署名した。この後、同省長主催の歓迎宴で出席者はテーブルを囲んで交流を深め、中津川の地歌舞伎が県の観光PRに一役買った。



岐阜県の魅力をアピールする古田肇知事、尾藤義昭県議会議長、杉山幹夫県日中友好協会会長（右から）＝南昌市の市立図書館

これに先立ち、訪問団は南昌市区画館での県紹介展開場式、省第二保育園での県産材を使った木育教室視察、漁舟湿地公園での記念植樹に臨んだ。



当協会名誉会長の古田肇知事と記念写真に納まる協会派遣団員＝南昌市の江西前湖賓館

**中部6県日中友好協会
訪中団に参加**

友好団体関係者と交流

中部6県日中友好協会訪中団は7月4日から9日まで北京、南京、上海3市を訪れ、友好団体関係者と交流した。

愛知、岐阜、三重、福井、石川、富山各県協会の代表計19人で当協会は土屋理事長、森下伊三男理事、五島博美理事を派遣した。日中平和友好条約締結40周年に合わせ、駐名古屋中国総領事館と中日友好協会の協力で訪中した。

一行は北京市内の中日友好協会を訪問した。王秀雲副会長は「中日関係を改善の兆しが見えてきた。民間の力でさらに前へ」と述べ、太田宏次団長（愛知県協会会長）は中部6県協会の取り組みを紹介した。



人民中国雑誌社で意見交換の後、幹部らと記念写真に収まる中部6県日中友好協会訪中団＝北京市内（人民中国雑誌社提供）

王衆一総編集長は「若い人にも読んでもらえる企画や日中両国を等身大で表現できるカメラマンの登用など、『情報発信と交流の記録』の原点を忘れず、紙媒体の使命を果たして行く」と気概を見せた。近年中国でも若い世代の活字離れは深刻とい、同社ではSNSを併用する。団員へのインタビューなどを『微信』（フォロアー20万人）にアップ、内外で話題になった。

**平和友好条約40周年
杉山会長が中国大使館の
祝賀レセプションに出席**

中国の建国69周年と日中平和友好条約締結40周年を祝う駐日中国大使館のレセプションが9月27日夜、東京都内のホテルで開かれ、約2千人の日中の各界関係者が出席した。

主催者を代表して程永華大使がいさつし、新中国の成立から現在までの経済発展を振り返った後、日中関係に触れ、李克強首相の訪日以降、両国の関係者が積極的な働きかけを続けた結果、「友好往来と交流熱が上がっている。このチャンスを見逃さず、安定の中で両国関係を発展させることを望んでいる」と述べた。続いて林芳正日中友好議員連盟会長（文科相）らが来賓のあいさつを述べ、福田康夫元首相の発声で乾杯した。岐阜県日中友好協会から杉山幹夫会長と土屋康夫理事長が招待され、杉山会長は程大使や汪婉参事官（大使夫人）と再会を喜び合い、「友好の新时代を待ち望んでいます」となどと握手を交わした。



程永華大使と握手を交わす杉山幹夫会長＝東京都内のホテルニューオータニ

民間交流ますます盛んに 日中友好新時代へ

岡山で交流会議

第16回日中友好交流会議が11月18、19の両日、岡山市で開かれ、新時代をリードする民間交流について活発に意見を交わした。平和友好条約締結40周年の節目に際し、「民間交流を進展させ、日中友好の新時代を切り開く」との岡山宣言を採択した。

この会議は、交流に携わる人が相互理解を深め、友好を促進しようと宇都宮徳馬、廖承志両友好協会会長の発案で1988年の北京での第1回を皮切りにほぼ2年おきに日本と中国で交互に開催している。

今回は「日中民間交流の新しい時代を切り開こう」をテーマに日中友好協会、中国人民対外友好協会、中日友好協会の主催で約三百人が参加、当協会からは土屋理事長が出席した。

全体会議では、日中友好協会の丹羽宇一郎会長が「訪日客のロコミなどによって中国人の対日好感度が上がっている。日中友好のさらなる飛躍、日中の新時代をつくるスタートとなるよう、心構えを確認し力を合わせよう」とあいさつ。中国人民対外友好協会の李小林会長は西日本豪雨への見舞いと一日も早い復興を願い、「郭沫若氏が若き日に学び、友

好の井戸を掘った内山完造、岡崎嘉平太氏を生んだ岡山の地での開催は感慨深い。新しい時代の発展を模索し、民間団体がさまざまな分野で交流を深め、心の距離を縮め、民に還元しよう」と呼びかけた。

その後、四会場に分かれ、民間交流の果たす役割や新時代にふさわしい考え方などについて意見交換した。この中で土屋理事長は両国の子どもがそれぞれの自然や伝統文化に触れ、交流を深める「新時代の教育交流」を提案した。

閉会式で「さまざまな情報を共有、分かち合えた」と総括し、2020年に中国で開く次回会議に向け、新しい発想で友好事業に取り組むことを誓い合った。



民間の力で日中の新しい時代を切り開くことを誓った第16回日中友好交流会議＝岡山市のANAクラウンプラザホテル

【宮本氏の講演要旨】

中国は内外ともに「大調整期」に入った

習近平政権2期目の課題は「経済」と「対米関係」である。中国で改革開放が始まって40年を迎えたが、中国が力をつけていけば米国とぶつかると、かつて改革開放を指導した鄧小平氏は『韜光養晦（とうこうようかい）』という言葉で、能力を隠し、国内でやるべきことをやって世界と協調していくよう国民に呼びかけた。

しかし、2008年の金融危機リーマン・ショックで中国は巨額の財政を出動、世界経済を救ったときとされ、10年にはGDP（国内総生産）世界2位の日本を追い抜き、米国に次ぐ経済大国になった。

すると中国人の間で抑制していたナショナリズムが頭をもたげ、ソ連崩壊後、一人勝ちして来た米国の言いなりにはならない、と中国の対外強硬姿勢は米国とぶつかるのは当然だった。

米国は中国と一緒にやっていけば、中国は米国の決めたルールに従うと安心していたが、中国は別の国際秩序をつくらうとしている。中国が米国に追い付き追い越すことは許さないとというのが野党の民主党を含め、ワシントンの政策決定者のコンセンサスになっている。

人民解放軍の幹部に会うとよく言うのは、「米国を甘く見てはいけない」。中国はベトナム戦争以後、実戦の経験がない。米国はずっと戦争をしている。クリントンやオバマ元大統領はインテリの弱さがあるが、トランプ大統領は違う。

中国は経済発展の方向性を変えないといけない。知的財産権（知財）などのより厳しい世界ルールを受け入れることだ。WTO（世界貿易機構）に加盟した時、開発途上国条項を適用され、ルールのおまけをしてもらったが、経済大国の今、そのルールは通用しない。世界と痛みを分かち合わないといけない。

もう一つ、中国は軍事安全保障の方向性を転換すべきだ。このままでは米国と衝突する。日中関係は改善したが、米中対立の構図は残ったまままだ。米国が猜疑心を持たないよう、日本は外交で段取りすべきだ。

日中関係は激しく殴り合い、これではまじいと握手をした段階。心から相手を抱きしめるまで至っていない。日中間の諸問題は平和的手段によって解決しなければいけない。

日本外務省は「尖閣諸島に領土問題は存在しない」と主張するが、現場から見ると領土問題だ。どちらかが『紛争』といえれば話し合えないといけない。一方、日本は南シナ海の領有権問題の直接当事者ではないが、中東産原油を日本へ運ぶタンカーの海上交通路であり、日本が

【宮本氏の講演要旨】

『紛争』といえは中国はテーブルにつかないといけない。

日中両政府は、安倍首相の訪中時に52件の経済プロジェクトの覚書を締結した。中国が進める現代版シルクロード経済圏構想「一带一路」に日本が協力、日中の企業などが第三国のインフラ整備を実施していく、しかも国際スタンダードで。メンテナンスまで含めた日本のODA（政府開発援助）の考え方を生かせば『ウイン・ウイン・ウイン』関係が生まれる。

2019年6月のG20大阪サミットに習国家主席の出席はほぼ決定。日中は首脳同士の往来によってやっとな国民同士の交流が出来る時代になった。

日本政府は2020年に4千万人のインバウンド（訪日外国人客）を目指す、その半分は中国に望みたい。韓国、台湾、香港はもう頭打ち。中国人は観光でお金を落とすほかに今の日本を見てどういいう社会をつくつたらいいのか、きつと学んで帰って行くはずだ。

彼らが望む『中国（庶民）の夢』はすでに日本で実現済み。日本人は自分たちの文化を大切に、安全で安心な社会をつくり上げた。日本を手本にしたい気持ちから敬意が生まれ、対日観も変わって行くだろう。日本人も中国に対する考え方を

えてほしい。日本人が一番嫌う中国人は“上から目線”の外交部長やスボークスマンだろう。しかし、多くの中国人は日々、『少しでもいい生活をした』、『少しでもいい教育を子どもに』、『少しでもいい医療を父母に』と一生懸命働いている。「中国人は〇〇」とは、いい友人には言えない。もうやめよう。

安倍首相訪中で日中関係は安定期に

日中関係は間違いなく発展しているが、米中及び戦後の国際秩序が動揺をきたし、米中対立という不確実的要因がある中で船出しなければなら

ない。その余波を受ける覚悟と同時に日中は手を組んで世界が大波をくわらう大嵐にならないようにする責任がある。何を考えているのかかわらないトランプ大統領と話が出来るのは安倍首相をおいてほかにない。米中対立のソフトランディングを図ることが日外交の差し迫った課題だ。

日本は中国を計算に入れた戦略を立てることだ。中国は共産党の一角独裁でも好き勝手はできない。習近平政権の腐敗摘発も国民の支持があるからこそのこと。李克強首相は開明派で知財に取り組み、中国を次の

段階へ導こうとしている。中国は変わるうとしていて。国民同士は交流と相互理解を深め、もっと近づこう努力してほしい。

会場の日本人の方に言いたい。日中関係を損なう一番簡単な原因は『歴史認識』。「南京事件はなかった」と言えば中国人は傷つき怒るのは当然だ。日本が過去に中国で何をやったか勉強してほしい。中国人の方にもひと言。戦後の日本人の大多数は先の戦争を反省し平和憲法を守り、平和国家をつくってきたことを理解してほしい。

(文・写真とも土屋康夫理事長)

訪中記 中国の発展ぶりを肌で感じる

武田由美 (文・写真とも)

朝、チリンチリンと鳴り響く音で目を覚まし、真っ白な薄いカーテンを開けると目に入るのは、道路を埋め尽くす自転車の群れ。店の売り子は愛想が悪く、漢字筆談のみ。これが私の脳裏に焼き付いていた28年前の中国だった。

中国からホームステイの受け入れや中国人の友人の話、メディアの断片的な情報でアップデートはしていたが、中国ビジネスに関わることでなり、今の中国を自分の目で確かめておく必要が出てきた。そんな中、お誘い頂いたのが今回の杭州・南昌の旅だった。

中国ネット通販大手アリババ集団の本拠地、杭州市は近代的でデザイン性高い高層ビルが並び、まさに大都市！浙江省、杭州市対外友好協

会のほか、数々の歓迎会では、豪華な食材を使った繊細で美しい料理に目を奪われた。何より温かいおもてなし、まるで別世界にきたようだ。同時に、長年日中友好に尽力されて来られた



目で確かめることの大切さを知った中国の旅。後ろは今を象徴する高層ビル群。筆者右端＝杭州市内

方々の恩恵にあずかるだけでなく、今回の出会いも大切にして今後の交流を続けていく責任さを感じた。

杭州日報報業集団では、董悦社長と幹部の若さにびっくり。メディアも

開発、AR（拡張現実）、文化、教育、ブロックチェーン部門まで広がり、けた違いの規模での発展ぶりを見せつけられた。さらに社員を大切にという社風は、私の考えていた中国企業イメージとは全く違い衝撃的だった。杭州から南昌へ移動すると街は建設ラッシュ。まさにこれからという活気を感じ、数年後の未来都市が目に見え。知らぬうちに植え付けられている思い込みが、今回見事に覆されてしまった。コピーではない『Made in China』の高品質でおしゃれなブランド商品も確立している。日本人がのんびりしている間に凄まじい勢いで発展している大国、中国を肌で感じる旅となった。

ほんの一部ではあったが、自分の目で確かめることの大切さを感じるとともに、民間交流の発展に微力ながら貢献できたらと考えている。

(当協会会員)